

先週の礼拝メッセージ(2023年9月3日) ベン牧師

「感謝」 ルカによる福音書 17:11-19

イエス様がエルサレムに上る途中の、ある村での出来事です。当時「既定の病」(新共同訳では「重い皮膚病」)に罹った人は、その感染力の強さゆえに村の外に隔離されて住んでいました。その中の十人が遠くに立って、村に入ってこられたイエス様に声をあげました。

「イエス様、先生、私達を憐れんでください」

興味深いことに、この十人はその場では癒やされませんでした。イエス様は「行って、祭司たちに体を見せなさい。」と言われたのです。

祭司に見せるとは、モーセの律法の中に、こういう病を患った人は必ず祭司に見せること、また、病が治った時も、祭司が回復の宣言をして、きよめの儀式をしてはじめて公に病からの回復を認められ、その後普通の生活に戻るべきことが定められていたからです。

彼らはイエス様の言葉に従い、まだ癒やされていないにもかかわらず祭司のところに向かったというのです。そして、その途中で癒やされました。これだけでも、この十人の信仰は見習うべきものではないでしょうか。

そのうちの一人が、イエス様の元に引き返して、イエス様に感謝をしたのです。その人はサマリア人だと記されています。もちろん、病が癒やされた十人は十人とも喜んだことでしょう。しかし九人は、病は癒やされ、生活は元通りになりましたが、残念ながらイエス様をメシアとして受け入れるには至りませんでした。病が癒やされることが、即、救いにつながるわけではないことの一例でもあるでしょう。

癒やされ、イエス様のもとに戻ってきたサマリア人は、真っ先に「イエスの足元にひれ伏して感謝」しました。ユダヤ人も、モーセ五書を信じているサマリア人も、人間に対しては決してひれ伏しません。なぜなら、ひれ伏すということは礼拝するということだからです。彼はイエス様を救い主として礼拝したのです。

以前にも申しましたように、ユダヤ人とサマリア人は犬猿の仲です。それなのに、このサマリア人は九人のユダヤ人といっしょになって、イエス様に癒しを願い出ました。なぜでしょう。一つは彼がユダヤ教に改宗した

ということが考えられます。あるいは、サマリア人でありながら、なんらかの形でユダヤ人と交わりを持っていたのかもしれませんが。

実は、新約聖書だけでなく、旧約聖書にも、メシアが来られたらユダヤ人だけではなく異邦人および全世界に神の救いが及びと記されています。ユダヤ人はそれを知っていましたが、現実には目の前にメシアであるイエス様が現れても、彼らは認めようとはしませんでした。サマリア人の信じるモーセ五書にも、異邦人の救いが記されている箇所はあるにはありますがわずかです。その多くは、サマリア人が聖書と認めていない詩篇やイザヤ書、エゼキエル書に記されています。ですから、サマリア人の彼は、ユダヤ人との交わりによって、来るべきメシアが異邦人の光、異邦人の救い主としてこられるということを知識として知っていたのではないのでしょうか。だから九人のユダヤ人と共に、イエス様の前に出て、さらに自分の病が癒やされたことを知って、彼は躊躇することなくイエス様のもとに引き返し、ひれ伏したのです。つまりイエス様こそ、自分たち異邦人を救ってくださるメシアであると信じたのです。

ここに戻ってこなかった九人と一人のサマリア人との大きな差があるのです。イエス様が残りの九人はどうしたのかと問われたのは、まさに、メシアとしてイエス様を受け入れたか否かの違いを問われたのです。クリスチャンにとって感謝の根本は何でしょう。イエス様ではないでしょうか。イエス様が私を救ってくれた、導いてくださっている、イエス様への信頼がある時、私たちの周りに起こってくる良いことも嫌なこともすべて神の主権のうちにあることだと知り、感謝が溢れてくるのです。私たちクリスチャンの感謝は、良いことがあったから感謝するのは当たり前ですが、常に神様に栄光をお返しするところに感謝のゴールがあるのではないのでしょうか。病を癒やされた九人は当然神に感謝を捧げたことでしょう。しかし、癒してくださったイエス様をメシアとして心からの感謝を捧げ、礼拝したのはサマリア人一人だけでした。

イエス様こそ、私の救い主であり、私を命をかけて愛してくださり、試練の中でも共にいて導いてくださる真実なお方なのです。私たちもこの恵みを受けた者として、イエス様に感謝を捧げ、その感謝を普段の生活の中で表していく者とさせていただきます。